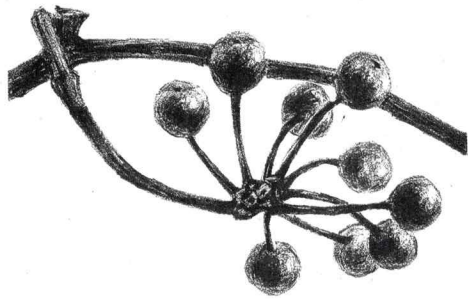


朝日 歌壇 俳壇



〈サンキライV〉 日高理恵子

●馬場のき子選

あなたかもあなたの子かも病院の床に転がされて
 赤子 (春日井市) 伊東紀美子
 なまず号「たのしかったと爆ぐ子を「遊び」
 やない」と諭す秋の日(戸田市) 蜂巣 厚子
 コンサート経団連の会館にきみははずかに長
 靴で来ぬ (大和市) 李 種太
 秋の陽の注ぐ飛火野公園にて乙女らスマホで
 鹿と遊べり (奈良市) 勝山小次郎
 モーゼなき出エジプト記見るが如かぜ退避す
 る民の列行く (東京都) 中島加路人
 あれこれ通ずる日系夫婦でも子の教育には
 千語を交わす (アメリカ) 大竹 博
 テロリスト数千人を殺したとあ胸を張りそ
 う告げる人 (水戸市) 檜山佳与子
 のっぺりな一日の午後につきささる孫の「た
 だいま」(ただ)だけ日本語
 (アメリカ) ソラー 泰子
 解禁の声高らかに響きあすわいはあかき湯
 気立てである (金沢市) 前川 久宜
 ☆新聞紙43回折ったなら月までとどくと知った
 秋の夜 (奈良市) 山添 聡介

【評】生まれながらに、すでに母親を襲った乳児たち、しかも激しい戦禍下で。ひ弱な命が、おむつひとつで転がされている写真を見たのだ。第一首はその時の悲痛な声。第二首は地震体験の「なまず号」の激震につい爆ぐ子供か。

●佐佐木幸綱選

小春日のバルーン百機風に乗り地上のクルー
 車走らす (小城市) 福地 由親
 焼酎をストローで飲む父妻し手は震えるも眼
 は座る (熊本県) 守田 くみ
 抜け殻は冷たくなりぬただ一度電柱に抱きつ
 いていた父の (平塚市) 北原 直人
 今日(そ)とはと葉譜念はせ近づくともつばり素
 通りする駅ピアノ (北九州市) 福吉真知子
 みみたぶの穴が消えたのアクセサリー禁止の
 職場五年目にして (東京都) 和田 由紀
 無口なるトンカツ屋の主その娘のクッキー買
 えは饒舌となる (仙台市) 小野寺寿子
 妻も子も勝より喰らふ秋刀魚なりさほど自慢
 の家風にあらねど (日立市) 加藤 宙
 ささ波は川の消しゴム写りこむ逆さのビルの
 真ん中を裂く (枚方市) 細美 哲雄
 プーゲンベリアと笑顔に満ちていた今はミサ
 イル飛ぶエルサレム (東京都) 増田 麻美
 呼びあいて登校の尻ら駆けてゆくカザにもあ
 ったはずの日常 (東久留米市) 塩崎 慶子

【評】第一首、「バルーン百機」の迫力。佐賀市開催の「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」に取材した作だろう。第二、三首、今は絶滅したすさまじい昔ふうの父をうたう。第四首、駅ピアノをこうして素通りする人も多いのだろう。

●高野公彦選

☆熊鈴をつけて下校児歩道ゆく令和五年の盛岡
 の秋 (盛岡市) 福田 栄紀
 かいばりに泥底さらす溜池のあつけらかんと
 生きてゆきたし (神戸市) 松本 淳一
 たのしみはだんだんオールひらがなのうたに
 漢字が増ゆるを見る時(北九州市) 白木 典子
 柿食へば病知らずと母の言ひ植ゑてくれたる
 柿の美甘し (春日部市) 土屋 和子
 柿を取る空の青さに深入りし一個一個を大切
 に取る (熊谷市) 内野 修
 鹿の鳴く声聞いて入場を待つ時間も正倉院展
 のうち (奈良市) 山添 聖子
 町ひとつ呑み込みそうな虹立ちて「テンション
 上がる夕餉の仕度 (安来市) 山本 訓枝
 折れ時がわからなくなつて長引いた優しい月
 が見ているケンカ (富山市) 松田 梨子
 喜びと悲しみのお面一瞬で付け替えキヤスタ
 ーはニュース読み継ぐ (東京都) 山下 秀樹
 ありがとうタイムカプセルの守りきし私の手
 紙に届く (上田市) 永井 陶子

【評】一首目は「熊鈴」の語が、各地で発生している熊被害を照らし出す。二首目は「溜池の(ように) あつけらかんと」の意で、和歌の序詞という伝統的な手法を活かした歌。三首目の作者は山添聡介君の成長ぶりを楽しんでいるようだ。

●永田和宏選

数えないで二万人の一人には息子ハリドは私
 のすべて (高山市) 松井 徹朗
 四時間の戦闘休止ガザ地区の幼き子らの二十
 時間よ (観音寺市) 篠原 俊則
 ☆新聞紙43回折ったなら月までとどくと知った
 秋の夜 (奈良市) 山添 聡介
 落葉するときも落葉をしたあとも風に従うし
 かない落葉 (館林市) 阿部 芳夫
 ☆熊鈴をつけて下校児歩道ゆく令和五年の盛岡
 の秋 (盛岡市) 福田 栄紀
 AとBに組み分けされてB組にされた我らの
 土気は上がらず (春日市) 横山 辰生
 「おかせり」と「おつかれさま」の言葉こそ全て
 だったと知るは「き」後 (蓮田市) 斎藤 哲哉
 どっちみちどちらかひどりがのこるけどどち
 らにしてもひとりにはひとり(豊中市) 夏秋 淳子
 しつてるよさんたくるうすはほはとままに
 しょにしてねばほはとままには (東京都) 青木 公正
 おじさんが挟んでくれたコロケのパンが食
 べたい二浪のころの (長野県) 丸山 志保

【評】松井さん、数字にはして欲しくないという、ハリド君の母の悲壮な叫び。白シャツの子は真っ赤なシャツを着て振り出された。篠原さん、四時間休止というが、それ以外の時間を空爆に曝される子供達。聡介君、ほんとだぜ、折ってみよう。

うたをよむ 「南風」の美点

俳句結社「南風」が九十周年を迎えた。
 砂丘灼けつひにひとり影の影
 山口草堂は昭和八年、大阪で「南風」
 を創刊した。戦前戦後の苦難の中で「生
 きる証の俳句」を標榜した。
 滝となる前のしづけさ藤映す
 鷲谷七菜子

草堂の晩年を助け、のちに主宰を継承
 した七菜子。ごく端正な作風であり、一
 句一句が正確に読者のもとに届く。

現顧問の津川絵理子、現主宰の村上朝
 彦の作品より。二人とも、俳壇におい

権 未知子

咳をして死のうばしさわが身より
 のちに、七菜子に代わり主宰となった
 樹実雄。晩年の作品の艶は、みごとであ
 った。
 見えさうな金木犀の香なりけり
 津川絵理子
 あをそらをしづかにながす冬木かな
 村上朝彦

「南風」の美点は、歴史がありなが
 ら、主宰の継承が血縁ではないことにあ
 る。そのときどきの主宰が各自の作風を
 展開させながら、弟子の育成に力を入
 れてきた。これは現俳壇において稀有であ
 り、特筆すべきこと。世襲制がとまれ
 ば直面する危うさ、つまり句の縮小再生
 産に陥らなかつたのである。

「群青」共同代表、俳人

第35回歌壇賞 東京都の早月くらさん(31)
 の「ハーフ・プリズム」(30首)に決まった。
 本阿弥書店の「歌壇」誌の新人賞にあたる。
 我妻俊樹・平岡直子著「起きられない朝の
 ための短歌入門」対談形式で「最初の一首」
 の作り方やスランプの乗り越え方、わからない
 歌、などのテーマを掘り下げ、歌の作り手、
 読み手を支える入門書。(書肆俣侃房・1870円)

風信

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メ
 ディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿
 は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品
 の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴
 海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝
 日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があ